慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	価値論に関する最近の二文献
Sub Title	
Author	寺尾, 琢磨
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1926
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.20, No.10 (1926. 10) ,p.1361(159)- 1365(163)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19261001-0159

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

が、大戰のために早められたのである。而してこゝではソヴィエット政府の研究はこの書の範圍に入らない。然し著者は最後にソヴィエット政府が前政府と同一困難に陷りはしないかと云ふ疑ひを抱いてゐる。

以上大體の紹介を終つたのであるが、少しく蕪雜で十分に意を盡し得なかつたことは讀者の寛恕を乞ふ次第である。本書が各編の終りに參考の統計その他を附したこと、卷末に參考書目を擧げてあること等は讀者に親切である。一言こゝに附加して置きたいことは近頃「經濟的發展」とか或ひは「經濟的文明史」等の名稱の下に所謂社會の經濟的事實を並列する傾向がある。本書の如きもその一つである。例へば財政に關する事項の如きは恐らく財政史に入るべきものであらう。かくの如く廣義に一般に經濟的事項を並べたものも「經濟史」と呼ぶべきか、又「經濟發展」と稱すべきか否やの問題は恐らく各人の趣意に依つて相違することであらう。然し唯本書の如く餘りに各々の技術的敍述に力を注ぐことは却つて一般の經濟的發展を明かにする上に不得策であると思ふ。寧ろ技術的方面、例へば鐵道に關する事項の一部の如きは交通史に入るゝを以つて適當と考へる。なほ經濟史そのものゝ性質、意義に關しては他日述ぶる機會があること、思ふ。唯標題の意義よりして一言したのみであつて、深く非難したわけではない。（一九二六、九、一九）

野村兼太郎

價値論に關する最近の二文獻

(1) K. Diehl—Von der sterbenden Wertlehre. (Schmollers Jahrbuch. 49 Jahrgang.)

(2) C. Turgeon—Contribution à l'histoire contemporaine des doctrines économiques. 1925.

價値論は今や危殆に瀕しつゝある。價値論上の從來の論爭は主としてその實質的內容に關するものであつたが、近時の論爭は寧ろ價値論そのものゝ存否に關するものである。この時に當つて獨佛二碩學の價値否定論と價値中心論とを紹介する事は强ち徒爾では無からう。

(1) Cassel, Dietzel, Liefmann, Gottl の如き現代學界の雄が何れも有力なる價値否定論を提唱し Diehl 亦之に多分の贊意を表する一事は價値論の危機を知らしむるに充分である。Diehl の如上の「瀕死の價値論」なる論文は右四氏の主張と之に對する自己の批判を陳敍せるものであつて、この問題に關する出色の好文字と言つて差支へが無い。

Cassel, Dietzel の兩氏は價格論を以て價値論に代えんとし、略々類似の見解を持するものであるが、之に就ては既に小泉教授の詳論せられた所であるから、此處に繰返す事を避ける（本誌、三月號 價値論の價値、參照）。唯注意す可きは Cassel は交換經濟を貨幣經濟と解し、「財貨の價値」は畢竟「財貨の價格」に外ならずと斷言し乍ら、「貨幣の價値」をば依然として認容しつゝある一事である。氏は價格の原因を生產手段の稀少性（Knappheit der Produktionsmittel）と需要の狀態（Beschaffenheit der Nachfrage）とに求めたるが爲、價格概念には貨幣概念が內包されてゐない。交換經濟の下に於ては

價格は貨幣單位に依つて衡量せらるるを以て貨幣單位の價格は常に同一であり隨つて貨幣價値は形式上不易なりと言はねばならぬ。故に詳言すれば氏は財貨の價値に對しては價格論を代位せしめんとし、貨幣の價値に對しては價値論を保有せんとするものである。Diehl は Cassel は未だ價値概念と全く絶緣するに至らずと斷言してゐる。猶 Cassel は多分の抽象を用ふる事に依つて、又經濟理論の範圍を甚だしく狹小ならしむる事に依つて價値否定論に到着したのであるが、Diehl は斯かる方法に對しても疑問を抱いてゐる。

Liefmann も亦價格法則を以て價値法則に代位せしめんとする者であるが、その內容は前者と全く別箇の趣きを呈してゐる。氏は經濟學に瀰滿する數量的物質的觀念を攻擊し心理的基礎に立つて之が改造を企つるものである。氏に從へば價値概念も亦右の謬見の所產であるから之を以てしては經濟現象を釋明し得ない。之を釋明するものは收益概念(Ertragbegriff)である。收益とは利用と費用(共に心理的觀念)の比較の結果であつて、價格も亦之に依つてのみ說明し得らるゝと言ふのである。隨つて氏に取つては斯かる主觀的欲望感より如何にして客觀的價格を構成し得るやが經濟理論の任務となるのであつて、斯くして生れ出でたるものが氏の所謂限界收益均等の法則(Gesetz des Ausgleichs der Grenzertrage)である。概言すれば、限界收益は各營利部門に於て投下せらるゝ費用の限界を決定し隨つて價格を決定する。而して各部門間の限界收益に高低ある時は低き部門の資本勞働は高き部門に向つて流出し結局限界收益は均等となり、價格は同一水準に齎される。換言すれば右の法則は費用の配分、隨つて價格を決定すると言ふのである。猶氏はこの法則は個人經濟、國民經濟の孰れに於ても指導原理たるの地位を占むるものと解釋してゐる。然らば貨幣價値に關しては如何。氏は貨幣を「抽象的計算單位」と解し、貨幣の客觀的一般的購買力なるものを否定する。要するに貨幣は價値の尺度に非ずして、利用と費用との比較を示す一般的稱呼(Generainenncr der Nutzen-und Kostenvergleichung)である。斯くの如く氏の主張する價格論は Cassel, Dietzel のそれと異る心理的概念である。之に對する Diehl の解釋は次の Gottl の部に於て述べやう。

價値否定論者として特殊の地位に立つ者は Gottl である。氏は何物にも勝つて經濟學上の獨斷論を排斥する。價値論に對する挑戰は實に之が一つの現れに過ぎない。他の價値否定論者は孰れも獨斷論を破壞して新たなる獨斷論を建設した。Gottl は之に反して寫實的經驗的方法を主張するものである。氏は從來の價値論を悉く atomistisch なりと見る。蓋し箇々の對象を竝列して、斯かる對象の交換現象を釋明す可き一箇の「全價格基礎」(Allpreisgrund)を求めんとするからである。斯くては複雜錯綜せる實生活と背馳する獨斷論に陷らざるを得ない。氏の建設せんと欲するものは實生活の多樣性を抱有する Allwirtschaftslehre である。氏に從へば經濟行爲の一切の對象は價値或ひは價格に非ずして Wirtschaftliche Dimension である。その詳細を此處に盡くすことは不可能であるが、要するに Marktpreislage 又は Konjunkturenlage と解すべきものであつて、孰れにしても箇々的概念に非ずして綜合的概念である、乃ち氏は價値、價格の兩者ともに einseitig なりとして之を排斥し、wirtschaftliche Dimension なる allseitig なる概念より經濟學の改造を企つるものである。Diehl は Gottl に多分の同情を寄せ、左の如く論じてゐる「余は單一的なる價値及び價格の法則を樹立せんとする努力に對しては久しき以前より疑問を抱き來つた。……價格論に就て言へば、一般的價格論を建設する事よりも特殊的價格論を求むる事がより重要である。完全なる自由競爭と經濟人の假設より理想的價格論を抽出する事よりも、現實の價格現象を探究する事がより重要に思はれる。一般的價格論は一般的相關關係を釋明す可き重大なる任務がある。資本主義的價格構成の釋明に關して

價格構成の主觀的性質を確認し、價格を生産費に歸着せしむる事の不可能なるを確認す可き事は余のLiefmannに贊する所である。乍併、快樂・不快の感情より出發して限界收益隨つて價格を決定せんとする主張には異議がある。價格構成に主觀的性質があるといふ事は單に價格構成には或るWillkürが存在し、隨つて所謂「精確なる價格法則」なるものを追求するの愚を中止すべしといふ意味に外ならぬ。……一言にして言へば、動搖する基礎に立脚する無謀なる思索的構成を捨て、具體的事實に立脚する寫實的經驗的方法を採る可きである」と。

(2) Turgeonは佛國に於ける有數の價値論者であつて、父子共著に係るLa valeur d'après les Économistes anglais et français depuis Adam Smith et les Physiocrates jusqu'à nos jours, 1913はこの方面の貴重なる一文獻である。表題の小册は前述せる否定論と正反對の動機より執筆せられ、「價値」の價値を高唱せんとするものである。氏に從へば「經濟學の禍源は思索的抽象論の濫用か又は事實に因はれ過ぎた先入觀念にあるのであつて、又近來經濟學は法律及び道德の兩面より甚だしき侵略を蒙りつゝある。經濟學に正道を示すものは價値概念である。この概念こそ經濟學の中心觀念（idée centrale）であつて、一切の經濟現象はこの周圍に旋回し蒐積するに過ぎぬ。價値が一切の經濟現象の中核たることは自明の理である。蓋し社會的事實の中より經濟學に屬するものを判別する標準は價値以外に無いからである。若し純粹なる經濟學に終始せんとすれば研究の範圍を價値及びその變動と並びに之が適用擴張たる價格と交換とに限定すべきである。經濟學が法律及び道德と密接なる關係にあるは言ふ迄も無いが、斯かる場合に價値の概念を逸脱する時は經濟學は忽ち根本よりその獨立を脅かされざるを得ない」。と言ふのである。然らば氏の所謂價値とは何ぞ。氏の言明する限りに於ては價値は個人的並びに社會的の實生活より發生する複雜なる現象であつて、使用價値、交換價値の孰れをも包含してゐる。そして價値は價格の原因と見てゐるが本質の說明は不充分である。私の解釋する所に依れば氏は「評價の心理」を價値の中核と爲し之を以て一切の經濟現象の原動力と認めたるが如くである。氏が價値に對する信仰は寧ろ宗教的熱情に近きものがあるのであつて、この傾向は氏の終結の次の一句から充分に窺ふ事が出來る。「Et l'importance de cette notion essentielle et spontané est telle, qu'elle rayonne, depuis l'origine des temps, à travers toutes les formes de l'activité humaine. C'est la lumière intérieure et souveraine qui, dans tous les échanges, guide nos désirs, éclaire nos comparaisons, détermine nos choix et nos acquisitions.……Rien ne peut effacer de notre ésprit l'idée de la valeur, idée mère, idée force qui actionne tout le méchanisme des échanges et qui, dans l'ordre on le désordre, soutient et prolonge la sosiété humaine, soit pour l'aider à vivre, soit pour l'empêcher de mourir」

註。Turgeonの如上の論文は昨年度のRevue a'histoire économique et sociale.に掲載せられ、最近別册として刊行せられし三十四頁の小册である。

（寺尾琢磨）